

—— チェルノブイリに思いをよせて ——

ホレーシエ

§ 阪神大震災支援活動終わる §

チェルノブイリ救援・中部では、2月1日から被災者支援の活動を始めましたが、4月30日現在で、92件1団体 総額 624,953円のカンパが寄せられました。このみなさまからの暖かい気持ちを、被災者の方に直接役立つ活動～緊急物資を直接現地に届ける、岐阜近郊への緊急避難及び定住のための活動～などの一部に使わせていただきました。

ご協力ありがとうございました。

現地では5月20日現在、まだ32,000人もの方が避難所生活を強いられています。支援活動は一応終わりましたが、この事実は、深く心に止めておきたいと思います。



岐阜での暮らしにもずいぶん
慣れ、市営住宅の自室で
くつろぐ 菴川さん。

(P.2に菴川さんからの手紙記載)

《事務局》〒466 名古屋市昭和区菜園町137-1-10

チェルノブイリ救援・中部 代表：渡辺春夫

【郵便振替】00880-7-108610 (暗号 名古屋8-108610も可)

☎FAX: 052-836-1073 (月・水・金・10:30~15:30)

(問い合わせは、お名前とシールの番号を明記し、返信用切手を同封の上、なるべく郵便でお願いします。)

神戸から岐阜へ来て

神戸から岐阜に来て2カ月近くなりました。3月24日の時点で、人生のピリオドをと考え、最後の思い出に長良のホテルに泊めて頂こうと考え、チェルノブイリ中部代表の寺町さんに意を決してお電話しました。それからは、立つ鳥後を濁さずと身辺整理をして、中央福祉センターに「岐阜に行くから福祉を打ち切って下さい。」とお願いしたら、何かを感じられたのか「寺町さんに電話するから待っててね。」と言われ、2時間後にはニコニコと「受け入れ先をお願いしたから安心して向こうで生活下さい。元気でネ！」と言われた時、アリヤこれは大変な事になったぞ。エイままよ！なるようになるわさ、と開き直ったのがあの時の正直な気持ちです（ゴメンナサイ）。

でも、岐阜駅まで迎えに来て下さった新田さんにお会いして、ああ何てバチ当たりな、もう一度生きなおさなければ、温かく受け入れて下さった方々に申し訳無いと思いき気持ちを切り替えたなら、神戸で生きた70年のもろもろのしがらみから解き放されて、心身共に軽くなったような気がしました。何て単純なんでしょう。ただ、住み慣れた神戸に比べて、岐阜の交通費と物価の高いのにはビックリ。物によっては3割から2倍もするので、これからは、神戸での生活感覚を捨てて取り組まなければと思いつながら、“ままよ！今日一日はゆったりと、明日から切り詰めてと”神戸での自分を振り返って、余りにもノー天気になった我身に呆れ返っています。

4畳半のおんぼろアパート、トイレ共同、風呂は銭湯。岐阜ではお部屋も3つ、うち風呂、台所も広く天と地の違いです。空気は良く、人情厚くこんなに恵まれた生活をして良いのかな……。未だに、学校や野外のテント暮らしの神戸の人達に申し、無く思うと同時に、平和な生活を与えて下さったボランティアの皆様はじめ、岐阜市の方々に心からお礼申し上げます。神戸のみなさまも、事情が許す限り、思い切った生活の切り替えをはかれんことを。

5月20日 滝川 満寿美（前住所・神戸市中央区）



特集『種の絶滅時代と遺伝子汚染』

第5回 (講演内容から抜粋：河田昌東 1989・11・21)

(最終回)

チェルノブイリの被害

チェルノブイリ原発事故で外部に漏れた放射能ははっきりわかっていませんが、ソ連政府の発表ではたった4%程度、京都大学の研究者たちの推定では9%とのことで、大部分は内部に残っています。それでも大きな被害が出ていることは新聞などで皆さんが目にしておりです。最近わかったことは原発周辺の林の松が枯れてしまった。その外側の放射能が比較的少ない所では、植物とか動物などで異常が沢山出ています。松の葉がふつうよりも10倍も多く出たり、タンポポの葉が1メートルにも大きくなったり。こういうことは結局遺伝子に悪い影響を与えたからです。食物連鎖を通じて放射能は動物や人間にも入ってくるでしょう。住民の染色体異常も伝えられていますが、人間の遺伝子にも影響がある、ということです。癌なども増えて来るでしょう。放射能による遺伝子破壊は目には見えにくいものですが、廃棄物管理に失敗したり、大事故が起こったりすれば遺伝子の破壊を通じて生態系を危うくするわけです。

バイオテクノロジーと生態系

最後にバイオテクノロジーと生態系について。現在は技術が進み、遺伝子を直接切ったりはったり出来るようになりました。それから生殖生理学といって、人工受精とか試験管内受精、免疫制御などが可能になっています。こうしたことが実験室内だけでなく野外で行われるようになったら生態系はどうなるでしょうか。アメリカでは今裁判が起っています。霜害の原因となる事がわかっているバクテリアの遺伝子を改造して霜の核を作らないようにし、それを畑にばらまくというのですが、それが野外でどんどん増えていったらどうなるかわからないのでやめて欲しい、という訴えです。最近日本で話題になるのはサケとか鱒などの魚の染色体を改造して3倍体をつくり全部雌だけ生まれるようにすると魚体が大きく商品価値が上がる、という研究です。これを川に放流すれば自然界での性比のバランスが崩れてしまいます。そうした場合魚の産卵行動が変わってしまわないか、自然界での種の安定性が保存出来るかどうかなど未知の事がいっぱいあるわけで、軽々には出来ないことです。

種の絶滅と人間の存在

森林の伐採とか化学薬品による環境の汚染、地球の温暖化などから始まって、直接遺伝子の変化や改造などすべての人間活動が生物の生存にとって大きな脅威となりつつあります。これらのことを我々はもう少し真面目に考えないと、人間も大きなエコシステム、生態系の中で暮らしているのですからそれらが破壊されればいずれ我々人間自身の生存にもはねかえって来ます。はじめに言ったように人類が誕生してから今までたかだか30万年です。地質年代から見ればほんの点に過ぎません。さらに今のようなアクティブな人間活動が始まってからは100年しかたっていません。恐竜時代(1億年前)の生物の絶滅速度は1000年に1種でしたが西暦1900年には年間1種になり、1975年には年間1000種、そして現在は1日に2-300種(年間数万種)と加速度的に進んでいます。こういうことを知ったうえで我々の生活、文化を考え直さなければならない時代になっているのです(終わり)。



お知らせ



- ◆救援・中部の下シャツ 一枚1,500円。ステッカー 一枚200円。好評です。
- ◇救援・中部オリジナルテレフォンカード 一枚1,000円/50度数
- ◆『絵はがき集』 1セット5枚300円(子どもたちからとどいた手紙や絵)
- ◇『たった一回の原発事故で』一冊515円+送料51円(救援・中部編 地湧社)
- ◆『とどけウクライナへ～私たちの救援日記』1,648円(坂東弘美著 八月書館)
- ◇現地ジャーナリスト・ネチポレンコさんと小児科医・ライサさんの来日講演録
一部 350円(専門家の解説付)

救援・中部までお申し込み下さい。

あなたも維持会員になって下さい

チェルノブイリ救援の活動を続ける為に、事務局の維持費用が必要です。事務量が
増え、新しいスタッフも仲間入りしました。是非、事務局維持会員になって下さい。

☆維持会員会費 10,000円/年(または、1,000円/月)

(※通信欄に“維持会員費”と記入して、救援・中部の口座にご送金を。)

竹内さんからの手紙



キエフで暮らし始めて8か月、秋から冬が過ぎ今は春と初夏の間。草木の花が一時に咲き初めてキエフの一番美しいといわれる時期です。人口250万程度で規模としては名古屋とあまり変わらないキエフですが、基本的に緑が多く、自然に恵まれた街だと私は思います。

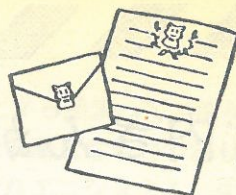
日本人の目で見ると、何だか訳の分からない空き地がたくさんあると感じるむきもあるようですが、そこに野良犬（基本的にでかい）やカラス（黒と灰色のツートン・カラー）や人間が走り回ったりたむろしたりしています。ちなみに私の住んでいる地区はキエフ市全体から見ると郊外のほうですが、地下鉄の駅近くにわりと広い松林があり、そこでリスを何度か見かけました。一戸建ての住宅などに住んでいるのはよっぽどの金持ちで、一般の人々は十階建あるいはそれ以上の高さのアパートに住んでいるのですが、アパート内で猫や犬を飼うことはごく当たり前です。そのかわりしつけは大変行き届いていて、鳴き声に悩まされるなど聞いたためしがありません。そして彼らは（私の見た範囲では）基本的に大変愛されています。（一部省略）

街を南北に貫く川（この上流に、というより厳密にはこの上流の支流プリピャチ川沿いにチェルノブイリ原発がある）でも、厳寒の冬期には凍結した川面に穴をあけて釣りをする人、そして気温20度を越えた最近では水着姿で川原にたたずむ人達が見かけられます。おそらくこの川で釣られたのであろう種々の魚も市場でまるのまま売られています。別荘で野菜を育てたりということも、もちろんインフレの現在家計を助ける意味は大きいですが、ごく普通のことです。つまり日本でいう「自然に親しむ」行為は、こちらではまだまだ当然のこととして生活の一部にしっかりと組み込まれているように感じられます。そしてその「自然」の中に、本来自然界に存在していなかった各種放射能が侵入してきたわけです。

話は違いますが、夜、星はとてもよく見えます。基本的に街灯その他の照明が少ないせいもあると思いますが。ではまた。（5月20日）

各地のたより

チェルノブイリ救援中部・大垣



こんにちは！ 大垣のムラサキツユクサの会です。

私たちは岐阜市民生活協同組合のサークルとして活動しています。会員は生協の主婦。いつも集まるのは生協のセンターです。生協の主婦ですから、食べ物や洗剤などの安全に気をつけている人が多くて、チェルノブイリ原発事故の影響で食品が放射能に汚染されるという事件をきっかけに「放射能や原発のことを勉強していきましょう。」という代表の大谷さんの呼びかけに集まってできた仲間です

いろいろ本部ともめながらも生協の中でやってこれたのは、長く理事をしていて、知識と発言力バッチリの大谷さんのおかげ。機動力と縫い物なら任せて、という伊藤さん。英語と歌と人前での話は山河さん。仕事はテキパキ、レタリングが得意な斎村さん。手作り絵本の稲葉さん。論理的な話とイラストは安田さん。計算が得意で、段取り上手な牧さん。農業の先生、戸倉さん。包容力たっぷりてやさしい禿さん。お習字の先生の大竹さん。頼まれたら嫌と言えない川瀬さん。

小さなグループなのに、いろんな個性が集まったおかげでいろんなことができました。講演会、映画会、小麦作り（その粉でうどんもお菓子も作りました）、大豆作り（その豆でみそも造っています）、紅茶の会、100人のかざぐるまキルト。サークル通信「紫露草」。パッチワークの横断幕作り。毎月26日には、街頭にも立ちました。チェル救に参加してからは、講演会や絵の展覧会、カレンダーや絵本をウクライナへ贈るキャンペーン。ウクライナ語のかざぐるまキルト etc. よくやってきたなあ！

時は流れ今のグループの悩みは、仕事を持つ人が増え、老親を介護しなければならない人も出てきたりで、なかなかみんなが集まらないこと。発足当時書物の中で学習した廃棄物やプルトニウムのことなど、現実のこととなり大変な時なのに、1人1人が忙しすぎる。

でもはじめて集まったころの思いを忘れずに、何とか都合をつけあって一緒に学び、思いを語り合っていきたいと思っています。



ムラサキツユクサの花

◎あなたのアイデア募集します!

1986年4月26日起こったチェルノブイリ原発事故から、早いもので来年は、10年目を迎えます。チェルノブイリ救援中部では、その10年目を一つの区切りとして企画に取り組む事になりました。

そこで“ぜひこういうことをやるべきだ”“こういうことをやってほしい”等々斬新なアイデアを、広く会員・読者のみなさんから募集します。

◆例えば 救援中部のメンバーのウクライナ訪問記、写真展、各地での報告会など。

また『こういうことをやりたいけど方法が分からない』と言ったようなちょっとした思いつき、小さなプランも大歓迎です。

今までに行ったキャンペーン等の反省点も踏まえ、ぜひ有意義な企画になるよう、みなさんのご協力をお願いします。

締め切りは7月31日

事務局までお送りください。

たくさんのご応募お待ちしております。

読者のみなさまへお願い

住所を移転されたときは、すぐに事務局にご一報ください。
ポレッシュのもどりをたくさん出すのは悲しいことです。

§次の方々の転居先をご存じの方は、事務局までお知らせ下さい。

阪神大震災で被災されている可能性もあります。

- ・吉田民子 様 ☎663 兵庫県西宮市津真砂町
- ・松本直美 様 ☎651-22 神戸市西春日台
- ・林 晶子 様 ☎663 兵庫県西宮市小松町
- ・糸山祐子 様 ☎658 神戸市東灘区田中町



《95年度代表になって》



渡辺春夫

来年の3月まで代表の肩書きを付けることになりました。私達の団体はピラミッド型の運営システムを採っていませんので、代表が交代しても、急激に何か変わるものではありません。ですからここで述べることは、設立以来関係をもって来た一人として、日頃考えていることです。

発足から満5年

チェルノブイリ原発事故から来年で10年を迎え、私達の団体が結成されて今年で満5年を経過しました。結成当時の参加者の多くは、大きな財政基盤をもった市民運動の経験はなかったようです。現地から超音波診断器や放射能測定器あるいは薬品とかが必要だ、とのリクエストがあった時「超音波診断器が送れるようになるのはいつのことやら」と思って活動を始めたものです。しかしその後の反響は大きく、共感者からの寄付は公表されているように、ボランティア貯金からの交付も合わせて、累計で億の単位をこえるまでになり、また病院や企業、団体からの協力も得られるようになって来ました。

個人的存在から社会的存在へ

ここまで来ますと私達の活動は、手弁当ですべて身銭を切って活動する個人的な存在から、社会的存在になり、広く社会に対する責任、そして現地に対する責任も変わって来ます。協力者に対しては、私達がどのような、何をやり、どうなったのか、という情報を出来る限りポレーシェを中心に提供し、また協力者から意見を収集し協力者と共に活動を進めて行く双方向的運営に努力して行きます。当然のことながら会計報告、監査報告も今までのように公表していきます。現地との関係においては、現地において最も必要とされるもの（ハードとソフト）はとにかく、これまで援助してきたものが効果的に活用されているかどうか、そして現地の未来にプラスとなっているかを絶えず検証し、また現地の要望について、一方的に受け入れ、物と金を送ればよしとするのではなく、双方の納得を十分図る努力をして行きたい。とりわけ現地には、いわゆる市民運動とか政府から独立した団体は存在しないといって過言ではありません。このことは、自称市民運動を行っている私達と現地とは、自ずからツーカーと言う訳には参りません。お互いの認識に差が存在することは当たり前とした上で、お互いの理解のために議論をしていきたいと考えています。

メンバーは多士済々

活動の内部にいて一生懸命に活動すればするほど、外がみえなくなることが往々にして発生します。そういう意味では、団体がモノカラー化（考えも、価値観も同じ）することを私は恐れるし、活性力を失います。

幸い毎月1回開かれる運営委員会のメンバーには多様性が見られていいことだと思っています。現在私達の団体には、中部地方の民間企業、大学関係、公務員関係、消費者運動の関係者や主婦、自治体議員などいろいろな人が運営に係ります。一層の多様性と組織の安定化のために、皆さんにこれまで以上にご支援をお願いします。

《 運営委員会報告 》

新緑の美しい金華山のふもと、岐阜の上宮寺で定例の運営委員会が開かれました。運営委員会は、毎月1回チェルノブイリ救援中部の各地域持ち回りで開かれているものです。チェル救（チェルノブイリ救援・中部を略してこう呼んでいます）の行ってきた活動報告、ウクライナ現地の報告 また、今後の課題・活動・運営全般について討議・決定する機関で、各地域の救援グループ代表（運営委員）と事務局によって構成されています。——と書くと、何やら堅苦しい会議のようですが、実は、お茶やお菓子をいただきながらの、雑談も交えた比較的リラックスした会議です。（もちろん、激しい論争になることもあります・・・）

今回のポレーシェから、この運営委員会報告を掲載することになりました。

以下、今回の運営委員会の主な報告と議題です。

報 告

☆3月にウクライナへ向け送られたミルクと車椅子は、無事、イリチェスク港に到着しました。しかし、船会社の都合で、移住基金委員会が受け取れず困っているとのFAXを受け取り、事務局は連休明けに船会社と連絡を取るようになりました。後日、移住基金委員会は、荷物を引き取ることができました。

☆いつも薬品は、現地の要請に応じ現物を送っていましたが、今回はその代金を送金し、現地で購入してもらいました。現地価格が、日本で購入する1/5から1/3ということで、試験的に行いました。現地からは、薬品の購入の領収書と明細が届いています。ワクチン（ジフテリア抗血清）500アンプル分も送金しました。

☆震災プロジェクトは、4月をもって終了しました。岐阜のプロジェクトが合計10数回神戸に行きました。岐阜近郊に緊急避難された方は12名で、9名の方が定住されました。被災者の方々のそれぞれの事情に係わる事の難しさが報告されました。

講 題

☆7月に、医師、細胞検査技師をウクライナへ派遣することになりました。名古屋市立大学の矢崎信医師（小児科）と松浦千秋さんです。カタログハウスのバックアップも得て、ジトーミル州立小児病院を拠点に活動する予定です。また、チェル救スタッフもこの医師たちに同行し、盛りだくさんの仕事をしてくれます。（医療援助の今後の方向性を探る・医療関係者－非医療関係者の有機的な関係、仕事の分担について・移住基金委員会との意志疎通・チェルノブイリ10周年に向けての相談など）

☆医薬品の現物ではなく、その代金を送金するという方法についてどう考ていくかということが討論されました。お金だけのやりとりになることによって損なわれる問題があるのではないか、それを避けるためにはどうしたら良いかなど、活発に討論されました。

また、医薬品の使われ方、その治療成果の報告を出してもらい、それを根拠にしての医療援助を行うことの大切さなども話し合われました。

これは、医師派遣とタイアップして行われていくことになる事も確認されました。

☆来年はチェルノブイリ事故から10年目、一つの区切りとして企画を考えていこうということになり、1～2カ月間にわたり、アイデアを募集することになりました。また、ウクライナ行きスタッフも、現地とタイアップした企画がもてないかどうか、相談してくることになりました。

《事務局だより》

先号のポレーシェ発行後、救援カンパ・維持会員費が続々と送られて来ています。

ありがとうございました。ご送金いただいた中に、こんな通信文がありました。

『子どもの日に、おばあちゃんからおやつ代。悩んだ末に募金します。今回に限り息子の名で送ります。』このころ、なんとかチェルノブイリの被災者の心に届くように・・・。

事務局の備品の殆どがリサイクル品。最近仲間入りした品々のなかのケツ作は、時代物の木製小引き出しと切手仕分け箱。どれも、以前の素性はわからないけれど、事務能率化に大いに役立っています。調達係りは、もちろん事務局長。みなさん気軽に事務局に来られてこれらの備品に囲まれて“ボランティア”して下さい。